

全日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会(1968~1977)の研究(3) — 第4回大会の概要と競技記録 —

A Historical Study of the Noto Peninsula Ekiden for Selected Japanese Universities during 1968-1977 (Part 3) — Documentations and Records of the 4th Race Competition —

大久保 英 哲 (人間科学部スポーツ学科特任教授)

Hideaki OKUBO (Faculty of Human Sciences, Department of Sport Science, specially-appointed professor)

親 谷 均 二 (人間科学部非常勤講師)

Kinji OYATANI (Faculty of Human Sciences, part-time lecturer)

北 川 潔 (星稜高校陸上競技部顧問)

Kiyoshi KITAGAWA (Seiryō High school Track & Field Club Adviser)

〈要旨〉

第1回開催(1968)から第10回大会(1977)まで行われた「全日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会」(「能登駅伝」)は、かつて日本大学三大駅伝と言われた大会であった。

大久保英哲・親谷均二は、「日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会の開催・廃止過程-第1回開催(1968)から第10回大会(1977)に至るまで-」(金沢星稜大学人間科学研究第9巻1号)の中で、本大会の開始と廃止過程に焦点をあて、「能登駅伝」が昭和43(1968)年能登半島が国定公園に指定された記念事業として、七尾市及び読売新聞社によって発案されたこと。読売新聞社は交通事情や都市環境の悪化により、自らが主宰してきた「青東駅伝」,「箱根駅伝」が将来的に実施困難となる可能性を見据え、それに代替する駅伝大会として育てる意図があったとみられること。しかしながら、昭和48(1973)年10月のオイルショック以後、大会は資金的に行き詰り、廃止されるに至ったことなど、主に社会的な背景を明らかにしてきた。また金沢星稜大学人間科学研究 第9巻2号では、北川潔を加えて、第1・2・3回大会のレース概要とチーム、選手、区間ごとの競技記録をまとめてきた。本稿では、第4回大会分について明らかにする。

はじめに

本論文は、大久保英哲・親谷均二「日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会の開催・廃止過程—第1回開催(1968)から第10回大会(1977)に至るまで—」(金沢星稜大学人間科学研究第9巻1号)、及び大久保英哲・親谷均二・北川潔

「全日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会(1968~1977)の研究(2)—第1・2・3回大会の概要と競技記録—」に続く研究である。前回の研究で課題として残した、第1~10回大会毎の詳細な実施記録、選手名、順位、タイム等のうち、第4回分について明らかにするものである。

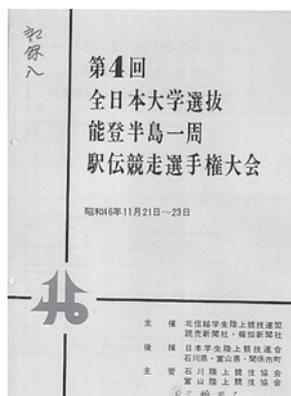


写真1. 第4回大会プログラム表紙

1. 第4回大会 1971 (昭和46) 年

第4回全日本大学選抜能登半島一周駅伝競走選手権大会は、昭和46(1971)年11月21日~11月23日の3日間行われた。

主催は北信越学生陸上競技連盟、読売新聞社、そして新たに報知新聞社が加わった。後援は日本学生陸上競技連合、石川県、富山県、関係市町村。主管は石川陸上競技協会と富山陸上競技協会である。

参加チームは北海道選抜、東北選抜、北信越選抜、日本体育大学、駒澤大学、大東文化大学、中京大学、大阪体育大学、大阪商業大学の9チームであった。

読売新聞北陸支社長鯉田大造は大会プログラム（1頁）に次のような挨拶文を寄せている。

「全日本大学選抜能登半島一周駅伝競走選手権大会も、今回で第4回大会をむかえることになり、年々充実した大会に発展していることをうれしく思っています。駅伝競走は、交通渋滞のひどい大都市周辺から締め出される傾向にあります。日本長距離走者の層を厚くし、全体の水準を高めるためにも駅伝はなくてはならないものであります。その点、能登半島は景色もよく、空気もよしと環境は満点で参加される選手諸君が日ごろきたえた実力を十分に発揮出来るコースであると思います。又皆さんの力走は、地域住民にとってもスポーツの振興によき刺激剤となりますので、事故のないよう学生スポーツの真髄を発揮され、正々堂々と競われることを希望します。（以下略）」

読売新聞では11月に「臨時PR版」⁽¹⁾を発行して、能登駅伝開催を特集した。走路図と通過予定タイム等のほか大会の見所が次のように報じられている。

第4回大会の見所

「大学一流選手の豪華な顔ぶれを集め、越後賀三州をまたぎ、3日間、361.4kmを走破する能登駅伝は、北陸でずば抜けた最長、最大規模の長距離レースなのはもちろん、大学駅伝としては全国でも最大規模のものに育った。去る43年に高岡―七尾―珠洲―輪島―羽咋―七尾のコースで始まったこの駅伝は、毎年充実した内容を加え、昨年3回からは最終日のコースを羽咋―津幡―金沢に変更延長し、北陸の中心都市金沢市のファンにも熱戦を見てもらっている。

こうした努力と実績が実り、わずか4年で“大学の三大駅伝”の仲間入りを果たしたのである。伝統と歴史がモノを言う学生スポーツ界では異例のことであろう。箱根駅伝、伊勢駅伝、この名レースにいまや能登駅伝が堂々と加わって“学生駅伝三大タイトル”が争われている。しかも、正月の2日間、東京―箱根往復コースで争われる伝統50年の名物レース箱根駅伝は、首都圏の過密と爆発寸前の交通事情から現状のままでの存続が問題になり始めている。伊勢駅伝は、1日レースのため、駅伝特有のドラマティックな盛り上がりには乏しいと関係者は口を揃える。こうした事情からすると、それこそ、能登駅伝は学生駅伝の一枚看板になる要素を備えていると言えるのである。

三大タイトルを独占、4年連続能登駅伝優勝を狙う“駅伝王国”日体大の岡野章監督は『能登は“最後の駅伝コース”だと言ってもいい。道を走る駅伝は記録がすべてのトラック長距離レースとは本質的に違う。道路の起伏、雨、風、時には雪といった天候の変化は駅伝には欠かせない。その中で競り合い、勝ち抜くのが駅伝のレースなのだ。もう1つ、めまぐるしく変わる能登の海岸線風景、これほど

駅伝向きの地形はない。単調なコースでは選手の疲労が大変だ。風景の楽しさが選手の疲れを忘れさせる。それに交通事情に余裕のある観光オフシーズン……。これほど要件を揃えたコースは他にはない」

さらに、主催者の立場から、能登駅伝を企画した意図を次のように述べる。

「北陸スポーツ界のレベルアップ、能登の全国紹介、それが能登駅伝企画の願いである。スポーツの世界は3年の実績で、目に見えてレベルアップするものではないが、それでも北信越学生陸上競技連盟の関係者は、北陸の各大学陸上長距離陣は以前とは比較にならない層の厚みを加えているという。地元を代表する北信越学連チームは、毎年実力をつけ、今大会でも沿道の声援に応える善戦を示してくれるだろう。同年代の一流選手と肩を並べて走るだけでも違うのである。

実際、今回集まってくる顔ぶれを見ても、監督陣では、駅伝チームを育ててはナンバーワンの岡野章監督（日体大）、現在も800m日本記録を持っている森本葵監督（駒沢大）、かつての3000m障害日本選手権者の青葉昌平監督（大東文化大）、マラソンの名選手として名をはせた中尾隆行監督（中京大）。選手の中には、今年は箱根駅伝に出場選手が20人、青森―東京駅伝出場選手は34人もいる。そして、全国から集まってくる若い選手たちは北陸で、能登で、何を見、何を感じていくのだろうか。木南金太郎石川陸協秘書（今大会主任）には、昨年の大会でこんな思い出がある。『中・四国学連チームの選手たちが“海ってこんなにきれいなものか”と能登の海の色を見て目を輝かせ、驚いているんですよ。私たちにしてみれば彼らが毎日見ている瀬戸内海が日本中で1番いい海だと思っていますからね。逆にこちらが驚きました。公害汚染で全然だめだそうですよ。改めて北陸の自然の貴重さを考え直させられましたね。』

箱根駅伝が交通事情から存続が困難になり始めていること、伊勢駅伝が盛り上がりにかけること、また、選手や監督の能登駅伝に対する高い評価を紹介しながら、やがて能登駅伝が箱根駅伝に取って代る可能性を見すえていることがわかる。

また 読売新聞11月15日⁽²⁾は、大会運営に携わっていた学生や自衛隊、警察、また北信越学連チームの大会前の様子を次のように紹介している。

「参加選手、役員たちが賛辞を惜しまない能登駅伝、これほどスケールが大きいレースを無事に運営することは並大抵のことではない。記録、連絡、中継点係、選手手配、雑踏整理……レース運営役員は、地元の人たちが買って出してくれる。3日間で延べ600人近く、参加選手の3倍以上の数字である。力走する選手にぴったりくっつく伴走車は自衛隊。大都会並みの車ラッシュの金沢市街地で選手が実力

を出し切って走るには石川県警が警備を担当する。こうした各方面の好意と協力で、能登駅伝は毎回成功を収め、飛躍している。競技運営を担当する宮口尚義大会事務局長（金沢大教官）は「確かにたくさんの協力がなければ、これだけスケールの大きいレースは開けない。全国の一流選手が顔を揃えることといい、箱根駅伝、伊勢駅伝、青森一東京駅伝など“先輩駅伝”の実績のある“駅伝の読売”なればこそ」。

さらに地元北信越学連について次のように述べる。

「北信越学連は、過去3回の能登駅伝が刺激になって、大学長距離陣の層が急激に厚くなり、今年は選手選考を早めに、夏から合宿を重ねて下位脱出を至上の合言葉にレースに臨む。すでに（11月15日時点）、地元北信越学連によってコースの下見、点検を終わり、大会準備はほとんど整った。4年前の第1回のときには未舗装路や道路工事中間区が多く、選手たちを悩ませたが、第4回を迎えて、今年は工事区間もほんの数箇所。未舗装路もほとんど姿を消した。このほど開かれた中継点審判会議でも選手たちが力を十分に発揮してすばらしい記録が出る素地は万全であることが確認された。」

読売新聞11月20日⁽³⁾は、北信越学連チームの能登駅伝への意気込みを「地元北信越チーム団結式」という見出しで報じている。

「北信越学連チームの団結式は、19日午後4時から金沢大学教育学部で行われた。北信越5県の大学から選ばれた18選手のごほとんどがこの日金沢入り。金沢大学陸上部キャプテン綿谷章君（3年）がこれまでの最強メンバーだ。東京チームにひとあわもふたあわもふかせてほしいと激励。続いて同部のマネージャー八十島節子さん（2年）が平塚光

明監督兼主将（金大）に花束を贈った。選手たちは昨年までは繰り上げスタートの“常連”だったが、今年は汚名返上。そのために強化合宿もみっちりやった。コンディションは上々。ぜひ中位定着を果たそうと誓い合っていた。」

大会前日に行われた開会式の模様は読売新聞11月21日朝刊⁽⁴⁾で次のように報じられている。

「開会式は、小片保大会長（新潟大教授）（代理）の開会通告で始まった。それぞれのチームカラーのトレーニングシャツを身につけた選手たちを前に、鯉田大造読売新聞北陸支社長が3回から金沢ゴールへ延長した本格的なコースを舞台に、大学三大駅伝の一角にふさわしい力走を期待している。沿道で声援を送るファンも例年より一段と多いはず。それに応えて頑張ってもらいたいと激励の挨拶を贈った。続いて木南金太郎大会委員（石川陸協）が競技開始を宣言、レース上の諸注意を与えた後、島田純行大会委員長（読売新聞北陸支社業務部長）から、各チームの主将へ、駅伝のシンボルであるたすきを手渡して大会気分は一段と盛り上がった。各チームのたすきの色は、北海道学連＝水色、東北学連＝空色、日体大＝黄色、駒沢大＝赤色、大東文化大＝小豆色、中京大＝緑色、大阪体育大＝橙色、大阪商業大＝茶色、地元北信越学連＝紫色。最後に東北学連チームの高橋研哉選手（東北工大2年）が正々堂々と力いっぱい走ることを誓いますと力強く選手宣誓を行って開会式を終わった。続いて監督会議、第1日10区間の各チームが練りに練った出場選手名簿を交換、さあいよいよレース本番だと引き締まった空気が漂っていた。」

第4回大会（昭和46年）第1日目

第1日目のレース模様を読売新聞11月22日朝刊⁽⁵⁾は次の

表1. 第4回大会 第1日目競技記録

区間	チーム名(監督)	日本体育大学 (岡野 章)	大東文化大学 (青葉昌幸)	中京大学 (中尾隆行)	駒澤大学 (森本 葵)	大阪商業大学 (藤田隆三)	大阪体育大学 (豊岡示朗)	東北学連 (田村 裕)	北海道学連 (大村良治)	北信越学連 (平塚光明)
1	高岡 ～氷見	19.3km 岩渕 仁 ①54.45	味沢 善朗 ④55.22	岡田 耕三 ②54.51	田中 喜一 ⑦57.14	天野 精三 ③54.58	橋本 元栄 ⑤56.54	高橋 研哉 ⑥57.01	石川 陽孝 ⑨1.00.10	大塚 偉介 ⑧58.55
2	～黒崎	20.3km 石倉 義隆 ①58.27	兼田 賢一 ②59.47	山村 勇 ③1.00.28	大沢 隆司 ⑤1.02.39	小林 寿朗 ⑥1.02.40	兼島 英樹 ③1.00.28	渡会 省吾 ⑦1.03.46	菊池 良治 ⑨1.08.03	山田 昭 ⑧1.07.54
3	～七尾	16.7km 小沼 力 ①47.53	下村 剛 ②49.13	岸根 修 ④50.36	宮崎 慶喜 ③49.44	赤松 由章 ⑦52.21	岡本 清 ⑤51.52	加藤 慎一 ⑨54.05	川股 正幸 ⑧53.44	平塚 光明 ⑥52.00
4	～中島	19.2km 笹渕 兼一 ①55.36	原田 忠夫 ②57.00	澄田 正人 ④57.40	小野 泰功 ⑤57.55	奥田 豊一 ③57.41	上田 俊明 ⑧1.01.07	黒田喜久夫 ⑦1.00.19	松田 義雄 ⑨1.02.41	井口 昌一 ⑥1.00.14
5	～穴水	17.1km 今野 秀悦 ③52.49	畑中 忠夫 ①52.34	西道 孝 ①52.34	田中 秀男 ④53.31	谷口 一光 ⑤55.05	西野 秀樹 ⑦56.59	三浦 光雄 ⑧57.14	後藤 和正 ⑥55.41	山越 慎司 ⑨1.03.07
6	～上曾山	12.4km 宮坂 隆夫 ②35.45	鎌田 茂 ①34.25	福田 輝男 ④36.46	宮川 寿夫 ⑤36.54	水川 浩治 ⑧39.30	馬淵 乾 ⑥38.07	伊藤 春次 ⑦38.20	田中 幸男 ③36.22	梶原 正己 ⑨41.19
7	～鶴川	12.3km 金子 良雄 ⑤35.34	尾形 清 ①34.57	中野 善行 ②35.08	江藤 雅彦 ⑥36.04	福田 雅広 ③35.23	塚本 敏雄 ④35.29	磯田 秀一 ⑦36.27	松井 俊治 ⑧38.46	大沢 正育 ⑨42.52
8	～能都	9.6km 町野 英二 ①27.40	原田孝三郎 ③28.29	松尾 望 ②28.05	高橋 秀春 ④28.44	蔵貫 知吉 ⑥30.58	山口 芳久 ⑤30.18	高橋 和也 ⑧32.40	榊 正信 ⑦31.20	山口 照夫 ⑨34.18
9	～松波	12.9km 村上 邦弘 ②39.26	薫内 祐吉 ④40.01	曾山 利和 ①38.58	佐藤 次男 ③39.32	上田 友之 ⑥41.25	石毛 和志 ⑤41.12	鈴木 盛男 ⑦42.26	高橋 明彦 ⑨43.56	親谷 均二 ⑧43.12
10	～珠洲	11.4km 大金 一幸 ①33.20	高橋 新次 ③34.00	山下 健次 ②33.21	高橋 計雅 ⑤36.02	細川 覚 ⑦36.13	魚住 広信 ⑧36.22	阿部 和夫 ⑥36.09	佐藤富士夫 ④35.35	安藤 伸朗 ⑨36.32
第一日	151.2km	①7.21.15	②7.25.48	③7.28.33	④7.38.19	⑤7.46.14	⑥7.48.48	⑦7.58.27	⑧8.06.18	⑨8.20.23

ように報じた。

「能登の“激変型”天候は、全く選手泣かせだ。第1日目(21日)は風がなかったが、スタートの高岡市は快晴。石川県内に入って七尾市で曇り始めた空は、4区の鹿島郡中島町で雨。いったん晴れて、7区の鳳至郡穴水町から雨に変わった。このコンディションの中、終始トップを守り、第1日をリードした日体大は4連勝を狙う優勝候補筆頭にふさわしい貫禄だった。1区の高岡市は9チーム一丸となって走りぬけ、雨晴海岸から氷見市にかかるところで“予定通り”岩淵(日体大)がスパート。岡田(中京大)、天野(大阪商業大)を従えるように約40m離して氷見市役所前にトップで飛び込んだ。3日間ともトップで完全優勝(日体大岡野監督)を狙う日体大は、前半にトップランナーを集め、2区で石倉が2位との差を300m、3区小沼が400m、4区笹淵が500mと区間ごとに差を広げ、作戦通り安定したペースでレース第1日をリードした。2位以下では、初参加の大東文化大が、2区兼田の力走で4位から2位に上がり、以後は各選手が安定した力を発揮、2位を堅持した。また、中京大も1区の2位から2区で3位に下がったものの、これ以後は3位を守った。2区以後は、上位3チームの順位が全く変わらないレース展開となったが、4位以下は1区おきに繰り上げスタートとなったこともあって、順位とは別に抜きつ抜かれつの接戦、沿道のファンには駅伝の醍醐味を見せる結果となった。

惜しかったのは、トップグループに入ると予想されていた駒沢大。1区の田中が膝の故障のため呼吸は楽なのに足が動かない(田中選手)という苦しいランニングで7位に落ちた。後半追い込んだものの、この痛手から立ち直れず4位となった。ブロックでライバル同士という大阪商業大、大阪体育大は繰り上げスタートがなければ、もっと面白いものになっただろう。区間ごとにシーソーゲームで沿道も沸いたが、結局、第1日順位は大阪商業大が2分38秒差で大阪体育大を抑えて5位になった。

学連選抜の3チームはやはり力不足。下位の7、8、9位を分けた。地元の期待を担った北信越選抜チームは、4区まで8位ながら小差で上位を狙い、善戦していたが、次第に離され、5区以後は、最下位を脱出できなかった。1位日体大と59分8秒差の大差。沿道の圧倒的な声援を受けた地元北信越の第1日目の成績には、関係者でなくてもがっかりしたのはしかたがなかった。だが、すっかり暗くなった珠洲市役所に着いた選手兼任の平塚監督の表情は意外に明るかった。私たちとしては目標を上回る記録でした。他のチームはさらに強かったのです。でも記録以上の収穫は、過去3回では見られなかった本領を各自が随所で見せたことです。“北信越根性”の芽生えを見た第1日とでも言いましょうかという。この日、第4区を走って区間6着

とチーム最高の成績だった井口昌一選手(信州大)は、この大会に備えての合宿に、長野から金沢までの260kmを、足の訓練のため自転車で、15時間がかりで参加したほどの熱心さ。それでもこの日中継点に飛び込んだ後、倒れるようになりながらまだまだ練習不足でしたと負けず嫌いの根性を見せていた。2区を走った山田昭選手(富山大)は、3年間新聞配達を続けている選手。平塚監督は自身3区を走った後すぐにあとで伴走車に飛び乗り、仲間を激励していた。一流チームに刺激を受けたこうした根性選手たちに引込まれるように、チーム全体のムードも過去3回の大会に比較して、ずば抜けていい。記録以上の収穫……もわかるわけである。2日目、3日目、さらに来年の大会へと、この根性を活かせば、沿道の大声援にきっと応えられるに違いない。」

沿道の声援の様子を同記事の中で、「沿道にウズまく声援」という見出しの下、次のように紹介されている。

フレー、フレー北信越チームファイト、ファイトだ七尾市内では、同市の8つのスポーツ少年団が、各地区に分かれて団旗を振り、沿道が埋まってしまうほどの熱狂振り。国道160号線の東浜町では、南星スポーツ少年団員を含め、約100人の大応援団。子供たちは学校の授業で作ったという小旗、一般の人は読売新聞旗を打ち振り、さながら大波が寄せてくるよう。藤重直美君(小6)は僕もマラソン選手になって走ってみたいと夢を膨らませていた。国鉄和倉駅前では、石崎スポーツ少年団員40人が声を枯らして応援。同団は、能登半島一周駅伝、選手の皆さん頑張れと、ポスターカラーなどで大書した縦60cm、横2mの模造紙2枚を道路わきに掲げた。さらに課外活動で作ったしつかり、ファイトと能登半島を描いた小旗を持って割れんばかりの声援。同団の責任者で石崎公民館主事の山中健治さんは3日前、子供たちの中から“自分たちで応援の小旗を作ろう”という声が出た。山から青竹を切り、たこ作りの講習で余った和紙を利用した。駅伝を通して、子供たちは図画、工作、チームワークと、とてもいい勉強になりましたと嬉しそう。

富山県境に近い七尾市大泊の海岸線沿いでは、道路拡幅工事の作業員約50人が、仕事の手を休め、かぶっていた手ぬぐいを振って応援。毎回見ているという岡崎たかさん(60)(同市東浜)、大川きみ子さん(44)(同市山崎)は昨年は佐々波地区で道路工事をしながら応援しました。若さがいっぱいうらやましいですね。この駅伝を見ないと、冬の季節に入る気がしません。作業員たちはそれ行け、がんばれと額の汗をふくのも忘れて声援、選手たちの元気付けをしていた。奥能登を訪れた観光客も一緒に観戦し、選手たちに声援を送っていた。

第4回大会（昭和46年）第2日目

第2日目の大会のもようを読売新聞11月23日朝刊⁶⁾は次のように報じた。

「第2日目スタートの珠洲市は前夜から雷が混じる激しい雨。スタートの時には小ぶりになったものの、選手は背中いっぱい泥を跳ね上げての力走だった。第11区、一団となって珠洲市街地を抜け、約5km地点で日体大の3日連続トップにひとあわ吹かせる（大東文化大青葉監督）という作戦の大東文化大松田が、積極的に飛び出した。これをマークして日体大古川、中京大的場がぴったりつく。中継点3km前から松田、古川が互いにスパートを掛け合い、的場も遅れないという見ごたえのあるレース展開となった。結局第11区は古川、松田、的場の順で約20m置きに飛び込んだ。4着以下は早くも400m近く離された。第12区に入って大東文化大は期待の鞭馬。たすきを受け取って約200mで早くも先行の日体大大金を捕らえた。3km地点から始まる未舗装の上り坂（珠洲市雲津）にかかると、予定していたように鞭馬がスパート。足を高く上げ、深い前傾姿勢でぐいぐい上がるピッチで大金を300mも離れた。大差をつけた鞭馬の好走でこの日の着順は決まった。第13区以後能登外浦に出て、強風が吹き付けるようになって、差は開くばかり。カーブと起伏の多い第2日目のコースでは、新人が多かった日体大は、大東文化大の走者を視界に捕らえることも出来なかった。第2日目は大東文化大のもの。うちとしては2分以内の差でいけば…と予想していた日体大岡野監督の見込みを大きく上回る大東文化大の見事な力走だった。一昨年、昨年の大会で第2日目コースは2年連続トップだった中京大もうちとしてはまあまあ（中京大中尾監督）の記録にも関わらず、初陣大東文化大の強さ、日体大の力走に終始3着を走るのが精一杯だった。駒沢大は第1日目の不振が尾を引いてか、意気上がり2日連続4位だった。2日間通算順位は4位まで第1日、2日目とも変わらなかったが、ライバル同士の大阪商業大、大阪体育大の5位、6位が入れ替わった。トップ争いとは別に、この2チームの最終日の接戦も興味め。学連選抜の東

北、北海道、北信越は、前日同様6位以上に上がることはできなかった。しかし、北信越の大塚偉介（信州大）が、起伏の多い第12区で頑張って、区間第5着の好走を見せたのが下位のチームでは光った。北信越学連チームは歴代監督2人が伴走車に乗り、過去の経験から割り出した的確な指示を選手たちに与えていた。

過去3回連続優勝、今回も優勝候補ナンバーワンの日体大だが、3日間ともトップの完全優勝はまだない。なんとかやりたくて、毎回挑戦するのですが…（岡野監督）とはいえそれが出来ない。“長丁場”駅伝レースの難しいところである。その最大の関所が第2日目。不思議なことに、王者日体大も第2日目でトップを取ったことは1回もない。今回も大東文化大にしてやられた。3日間を通じて、最も短い距離、だが最大の起伏、内浦から外浦へと一変する気象条件…。だが、それだけだろうか。一昨年、昨年と第2日目にトップを占めた中京大の中尾監督はわれわれの狙いどころは第2日目だけと言う。部員89人から選手を選ば日体大の選手層。メンバーを揃えるだけでも大変な他の大学が、それに対抗するにはわずか5区間の第2日目に少ないトップランナーを集めての“玉砕作戦”しかない。中京大がそれを成功させ、初参加ながら大東文化大はさすがに能登駅伝の特徴を読んでいた。そして、日体大はいつも野望をくじかれている。輪島入りした大東文化大の青葉監督は日体大のいいようにやられてはたまりませんからねと会心の笑みを浮かべていた。長い距離を争う駅伝だが、レースの細かいところにも興味の焦点が潜んでいた。」

第4回大会の輸送運搬に当たったのは自衛隊だったが、その様子も「自衛隊が“裏方さん”」⁶⁾との見出しで詳しく報じられている。

「自衛隊が“裏方さん”（見出し）：競技がスムーズに進んでいるが、1番の影の功労者は陸上自衛隊第14普通科連隊（金沢市）の“輸送部隊”。連日ジープ13台、キャリヤ（人員輸送車）2台、盛一吉宏2等陸尉ら隊員15人を動員。各チームの監督伴走車を運転したり、走った選手を中継点や旅館近くまで運んでいる。誠一二尉の安全運転で事故を起

表2. 第4回大会 第2日目競技記録

チーム名(監督)		日本体育大学 (岡野 章)	大東文化大学 (青葉昌幸)	中京大学 (中尾隆行)	駒澤大学 (森本 葵)	大阪商業大学 (藤田隆三)	大阪体育大学 (豊岡示朗)	東北学連 (田村 裕)	北海道学連 (大村良治)	北信越学連 (平塚光明)	
11	珠洲 ～栗津	15.4km	古川 久司 ①43.56	松田 強 ②43.58	的場 幸夫 ③44.02	戸村又治郎 ④46.38	平田 書男 ⑤54.20	塚本 敏雄 ⑥46.33	渡会 省吾 ④46.21	篠原 秀男 ⑦47.09	平塚 光明 ⑧47.57
12	～狼煙	7.4km	大金 一幸 ②21.49	鞭馬 講二 ①21.05	岡本 直亮 ④22.16	田中 喜一 ③21.58	水川 浩治 ⑦23.30	川合 照道 ⑧23.31	川野 部修 ⑨24.01	田中 幸男 ⑥22.56	大塚 偉介 ⑤22.38
13	～大谷	18km	田ノ上貢一 ②53.48	森下 茂樹 ①53.07	角 三喜男 ③54.05	宮川 寿夫 ④57.17	前田 和久 ⑨1.03.10	谷口 利広 ⑤58.14	伊藤 春次 ⑥58.40	久保田 実 ⑦1.00.23	親谷 均二 ⑧1.02.09
14	～南志見	18.6km	堀内 清輝 ②54.54	安田 亘 ①54.05	稲垣 裕 ④56.39	井上 忠雄 ⑦57.56	亀谷 宏治 ③55.49	橋本 元栄 ⑥57.38	石村 幸作 ⑤57.26	大畑 孝裕 ⑧1.01.45	今田 憲司 ⑨1.03.53
15	～輪島	15.6km	橋本 定雄 ②47.16	若宮 義和 ①46.04	萩原 久幸 ④48.06	佐藤 次男 ③48.00	中西与志雄 ⑥49.42	西野 秀樹 ⑤49.03	鳴沢 光政 ⑦49.59	水井 裕彦 ⑨52.57	白崎 繁 ⑧51.10
第二日		75.0km	②3.41.43	①3.38.19	③3.45.08	④3.51.49	⑧4.06.31	⑤3.54.59	⑥3.56.27	⑦4.05.10	⑨4.07.47
通算		226.2km	①11.02.58	②11.04.07	③11.13.41	④11.30.08	⑥11.52.45	⑤11.43.47	⑦11.54.54	⑧12.11.28	⑨12.28.10

こさず、選手サービスをモットーにしているという言葉通り、各チームの評判は上々。監督たちはこちらの考えどおりのペースに合わせ、正確に運転してもらえて大助かり。選手たちもぶっさらぼうかと思っていたら意外だったと感謝していた。

また、沿道の様子も合わせて紹介されている⁶⁾。

「授業を中断して応援（見出し）：輪島市町野町の駅伝コースでは輪島実業高町野分校の生徒263人が選手を迎えた。授業時間に多少影響したが、体育の授業の参考になればと激励したという。」とエピソードも交えながら報じられている。

第4回大会（昭和46年）第3日目

第3日目の大会のもようは読売新聞11月24日朝刊⁷⁾に次のように報じられている。

「第2日目にトップを争い、2日間通算で日体大にわずか1分9秒差と迫って意気上がる大東文化大は、最終日、一か八かでぶつかる（青葉監督）という積極的な作戦。この日のスタートの第16区、大東文化大下村は思い切って飛び出し、日体大今野を抑えてトップ。第17区の日体大石倉は懸命な追い込みで大東文化大安田を抜いた。しかし、安田は負けてたまるかの根性で約10m抜き返して引き継いだ。この区間の壮烈なデットヒートは3日間を通じてもハイライト。特に安田は途中で左足に痙攣を起こしながらも歯を食いしばっての頑張り。青葉（大東文化大）、岡野（日体大）両監督らコーチ陣は、伴走ジープで総立ち。フロントガラスにしがみついて声援を送っていた。

両チームのトップ争いに、他のチームは全く付いていけず、早くも中京大が約500m離れ、他のチームは300m近く離されてしまった。勝負どころは次の18区。日体大古川、大東文化大若宮は、ともに前日からの連続出場。しかし、若宮は前日の最終区間を走っただけに、疲れが回復しきっていなかったようだ。前日、堂々とトップで輪島市役所前でテープを切った軽やかな走り方ではなかった。足が上がり、重い感じ。古川は、この日のほうが快調な感じで、憎いほど速いピッチで若宮に追いつきどンドン離していった。大東文化大の頑張りもここまで。日体大が19区笹淵、21区田之上、23区町野、24区岩淵、26区小沼と箱根駅伝のペースを続々と繰り出し、差は開く一方。大東文化大の初参加逆転優勝の望みは消えた。

3・4着は、この日も中京大、駒沢大が占め、3日間連続不動の順位。通算成績もそのとおりになった。駒沢大森本監督はうちの力では1、2位はとても無理。そうかといって下位とは力の差がはっきりしている。中途半端なレースになったと言っていた。前日8着の大阪商業大は、頑張って5着に入り、通算でも5位に上がった。また尻上がりに調子を出した北海道学連が6着に入って、下位のレース展開を面白くした。

7着大阪体育大、8着東北学連、9着北信越学連は、やはり選手層の厚みという点で、上位とは力が離れすぎていた。11人も出場する日には、それがはっきり出てしまった。地元の北信越学連は第16区平塚、最終区間親谷の金大勢が頑張って、沿道のファンの拍手を浴びたのが目立った程度。

表3. 第4回大会 第3日目競技記録

区間	チーム名(監督)	日本体育大学 (岡野 章)	大東文化大学 (青葉昌幸)	中京大学 (中尾隆行)	駒澤大学 (森本 葵)	大阪商業大学 (藤田隆三)	大阪体育大学 (豊岡示朗)	東北学連 (田村 裕)	北海道学連 (大村良治)	北信越学連 (平塚光明)	
16	輪島 ～上縄又	8.8km	今野 秀悦 ②25.28	下村 剛 ①25.14	山下 健次 ③25.47	田中 喜一 ④26.14	福田 雅広 ⑤26.27	馬淵 乾 ⑧27.44	磯田 秀一 ⑥27.35	田中 幸男 ⑨27.54	平塚 光明 ⑦27.36
17	～門前	14km	石倉 義隆 ①39.43	安田 亘 ②39.55	山村 勇 ③40.53	大沢 隆司 ④41.09	亀谷 宏治 ⑤41.52	谷口 利広 ⑧44.22	黒田喜久夫 ⑥43.08	松田 義雄 ⑦43.32	山田 昭 ⑨45.44
18	～剣地	12.4km	古川 久司 ①34.57	若宮 義和 ③35.31	的場 幸夫 ②35.05	江藤 雅彦 ⑤37.14	奥田 豊一 ④36.17	小柳 繁清 ⑥37.41	鈴木 盛男 ⑧39.08	久保田 実 ⑦38.33	安藤 伸朗 ⑨40.59
19	～富来	13.6km	笹淵 兼一 ①39.07	森下 茂樹 ④41.10	中野 善行 ⑤41.36	宮崎 慶喜 ②40.01	小林 寿朗 ③41.05	魚住 広信 ⑧45.00	工藤 純一 ⑨46.52	菊池 良治 ⑥43.46	白崎 繁 ⑦44.32
20	～直海	16.2km	川島 克実 ④48.48	松田 強 ②47.28	岡田 耕三 ①47.18	田中 秀男 ③48.39	上田 友之 ⑧52.50	兼島 英樹 ⑥51.23	石村 幸作 ⑦51.43	石川 陽孝 ⑤50.13	大塚 偉介 ⑨53.11
21	～志賀	9.1km	田ノ上貢一 ①25.52	原田 忠夫 ③26.42	稲垣 裕 ②26.24	皆川 和夫 ⑥28.39	蔵貫 知吉 ⑦29.00	山口 芳久 ⑤28.20	阿部 和夫 ④28.18	村上 隆雄 ⑧30.34	藤山 徹 ⑨31.21
22	～羽咋	15km	村上 邦弘 ①44.23	畑中 忠夫 ③45.02	曾山 利和 ②44.56	鈴木 和芳 ⑦48.19	赤松 由章 ④46.07	石毛 和志 ⑤47.31	鳴沢 光政 ⑥47.44	後藤 和正 ⑦48.19	若井 春雄 ⑨49.33
23	～高松	16.6km	町野 英二 ②49.17	鎌田 茂 ①49.09	西道 孝 ③49.28	小野 泰功 ⑥51.14	天野 精三 ④50.11	上田 俊明 ⑤51.07	加藤 慎一 ⑨52.48	川股 正幸 ⑦52.05	井口 昌一 ⑧52.02
24	～津幡	13.7km	岩渕 仁 ①38.57	鞭馬 講二 ②39.11	松尾 望 ⑤42.30	井上 忠雄 ③41.44	谷口 一光 ④42.25	川端 茂樹 ⑧45.46	横地 博 ⑦45.03	篠原 秀男 ⑥42.42	吉沢 浩志 ⑨46.16
25	～森本	7.8km	堀内 清輝 ①22.09	味沢 善朗 ②22.29	岸根 修 ③22.42	高橋 秀春 ④23.10	細川 寛 ⑤24.18	川合 照道 ⑧24.39	鉄 和洋 ⑥24.26	高橋 明彦 ⑦24.33	山越 慎司 ⑨26.31
26	～金沢	8km	小沼 力 ①21.56	兼田 賢一 ②22.52	岡本 直亮 ③23.14	加藤 滋 ④24.22	宮本 厚 ⑨26.50	古市 幸司 ⑧26.04	川野部 修 ⑥25.15	佐藤富士夫 ⑤24.56	親谷 均二 ⑦25.39
	第三日	135.2km	①6.30.37	②6.34.43	③6.39.53	④6.51.49	⑤6.57.22	⑦7.09.37	⑧7.12.00	⑥7.07.07	⑨7.23.24
	通算	361.4km	①17.33.35	②17.38.50	③17.53.34	④18.21.57	⑤18.50.07	⑥18.53.24	⑦19.06.54	⑧19.18.35	⑨19.51.34

初参加の大東文化大により、それまで日体大、中京大、駒沢大によってトップ争いが行われていたが、新たに一校加わる形となった。中位がクラスのチームがなく、駒沢大にとっては争うチームがない物足りないレースになったようである。」

閉会式の様子も読売新聞11月24日朝刊⁷⁾に次のように報じられた。

「閉会式は、午後4時から金沢市出羽町の金沢女子短大体育館で行われ、成績発表に続いて表彰に移った。優勝の日体大には、鮎田読売新聞北陸支社長から輪島塗の読売新聞優勝大パネル、また報知新聞社から優勝杯、北信越学連から優勝盾が贈られた。2位大東文化大、3位中京大にも読売新聞社、報知新聞社からそれぞれ盾が贈られた。26区でそれぞれ1着となった選手たちに贈られたのは区間賞。今年初めて民芸品が登場した。高岡市の銅製ペン皿。能登駅伝にふさわしい郷土色を出せば、遠来の選手にもきつと喜んでもらえるだろうという主催者側の心づくし。」

第4回大会沿道の応援の様子、駅伝の波及効果は次のようにまとめられ報じられた⁶⁾。

「興奮の波残り閉幕（見出し）：3日目のスタート地点輪島市では、駅伝最終日とあって同市名物朝市に買い物に訪れる選手たちが目立った。鮎のほか、秋から冬への味覚、ズワイガニなどの新鮮な魚介類がいっぱい。買い物を楽しんだり、他大学の選手と一緒に写真を撮ったりで駅伝最終日らしい雰囲気だった。

金沢市・県庁前ゴールは昨年に続く2回目だが、市民にはすっかり“おなじみ”といった感じ。小春日和に恵まれ、休日とあって買い物帰りのサラリーマンの親子連れや観光客など数百人が、ゴール予定時間1時間前からつめかけた。選手が次々入ってくるたびによくやった、ご苦労さんと小旗を打ち振り盛んな拍手を送っていた。

羽咋郡富来町では、この日同町体協主催の国体表彰記念ロードレース大会。12回目と回を重ねているが、能登駅伝を勉強し、刺激剤にしようと3年前からわざわざ駅伝選手が通過する日に大会を計画している。ロードレース参加選手は、同市を午前過ぎに通過した大学の一流選手の足ぶりをじっくり勉強したあと、午後2時スタート。中学生たちは駅伝選手のように頑張れば走れるんだと、前半から積極的なレースを展開。団体協は昨年よりも参加選手が増え、町民体育の呼び水になりつつあるとうれしそうだった。」

また学生役員の中でも中心となって仕事をしていたのが金沢大学の生徒であったが、彼らが能登駅伝に似せたミニ能登駅伝を行った様子も合わせて紹介されている。

「金大生が“ミニ能登駅伝”実施（見出し）

能登駅伝に役員として参加した金沢大学教育学部の学生たちが、金沢市内で能登駅伝のコースを再現し、“ミニ能

登駅伝”を行った。1チーム15人、A・B2チームに分かれ、コースは金沢大学を発着点として、市内をめぐる26区間36.14kmで能登駅伝の10分の1に縮小。開会式、選手宣誓まですべて本物そっくりに行った。女子学生も選手として走ったり、宮口尚義教官もアンカーを努めたりして、デットヒートの展開を繰り返していた。このあと本物大会の反省会を開き、こんなに楽しい駅伝、来年はもっと盛大なものにしようと話し合っていた⁷⁾。」

ゴール予定時間の1時間も前から県庁前に数百人がつめかけていたということから、県庁前のゴールになってから2回目の大会となるが、地元の人々の能登駅伝に対する関心は大きくなっているようである。

また、羽咋市富来町で行われていたロードレースは能登駅伝の当日に大会を企画、選手の応援をしてから始めるという計画もあって、参加者が増えていると報じている⁷⁾。

能登駅伝が、徐々に地元に着定してきていることを示すものであろう。

まとめと今後の課題

幻の全日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会（1968～1977）のうち、昭和46年（1971年）に開催された第4回の競技概況と競技記録をまとめた。

さて、この昭和46年という年はどんな世相だったのであろうか。世界経済の連携協調を図る目的で世界経済フォーラムという国際機関が設立され、スイスのダボスで第1回年次総会が開かれた。2月にはアポロ14号が月に着陸。ベトナム戦争では南ベトナム軍がホーチミンルートの遮断を目的にラオスに侵攻した。3月には東京都の多摩丘陵に建設された多摩ニュータウンの入居が開始された。4月には自動車など6業種の資本自由化が実施された。千葉テレビや群馬テレビなど地方テレビ局が開局している。6月には新宿副都心の超高層ビル第1号となる京王プラザホテルが開業した。7月には公害対策本部を発展的に解消して環境庁が発足した。7月、阪神の江夏豊がオールスター9連続奪三振の記録を樹立した。日中関係が急接近する一方、8月にはドルショックで、東京株式市場は史上最大の大暴落を記録し、円が変動為替相場制に移行した。9月には日清食品がカップ麺の先駆けとなる「カップヌードル」を発売した。10月17日、読売巨人軍は阪急を4勝1敗で下し、日本シリーズ7連覇を達成した。12月には首都高速道路と東名高速道路が接続した。このようにベトナム戦争などの不安材料はあったが、日本国内では好調な経済に支えられて、次々と高速道路や超高層ビル、ニュータウンが建設され、テレビ局の開局も相次いだ。読売新聞も報知新聞も読売巨人軍日本シリーズ7連覇に象徴されるように、順風満帆の時代だったのである。それだけに交通渋滞や公害問題

など環境問題が深刻化し、箱根駅伝などの将来が不安視される中で、この能登駅伝が注目されていたことが分かる⁽⁸⁾⁽⁹⁾。

第5～10回分の詳細なデータ、さらには関係者への聞き

取り調査や、コース沿いの人々に刻まれた記憶を遺産として引き起こしながら、全日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会（1968～1977）の全体像を明らかにし、そのうえで本大会の歴史的意義について述べていきたい。

注及び引用参考文献

- (1) 読売新聞, 昭和46年11月PR版
- (2) 読売新聞, 昭和46年11月15日朝刊
- (3) 読売新聞, 昭和46年11月20日朝刊
- (4) 読売新聞, 昭和46年11月21日朝刊
- (5) 読売新聞, 昭和46年11月22日朝刊
- (6) 読売新聞, 昭和46年11月23日朝刊
- (7) 読売新聞, 昭和46年11月24日朝刊
- (8) 長谷川秀記, 読める年表・日本史, 自由国民社, 1995 (増補改定) pp.1043-1044
- (9) 1971年 (ウィキペディア), <https://ja.wikipedia.org/wiki/1971%E5%B9%B4> (2016年8月1日取得)

付記

本論文は、大久保英哲が全体の構成や表現を含めた論文作成を統括している。その際、大久保が指導した鈴木仁子(2009)「全日本学生選抜能登半島一周駅伝競走大会について-第1回開催(1968)から中止(第10回大会・1977)に至るまでの経緯-」, 平成21年度金沢大学教育学部卒業論文を基本資料として参考に行っている。また表1～表3は、親谷均二と北川潔が、これまでの所蔵資料の中から当時の記録をもとに作成したものである。ただ、この原記録は一部選手氏名が不正確であったり、一部記録の合計値が合わないなど、不整合があることも事実である。可能な限り修正を試みたが、なお関係者諸氏のご指摘、ご叱正をお願いしたい。